

動物遺存体の調査 (12)

埋蔵文化財センター

本年度は、島根県出雲市教育委員会の行った奈良時代から平安時代末にかけての上長浜貝塚と、千葉県君津郡市文化財センターの行った古墳時代から中世にかけての郡遺跡の資料の分析を行った。

上長浜貝塚は、『出雲國風土記』に記された「神門水海（かむどのみずうみ）」と日本海との間の砂丘地に立地し、砂丘の急速な成長のために廃絶した。貝層は厚いところで2メートルにもおよび、厚い純貝層と灰、炭化物、混貝土層からなる。貝類種は現在では見ることのできない殻長4センチ以上のヤマトシジミが99パーセント以上をしめる。発掘後市教委において採取した貝層を水洗選別し、動物遺存体の採取を行い、埋蔵文化財センターにおいてその同定、集計を行ってきた。採集した魚骨は65,000点におよぶが、哺乳類は100点にしか過ぎない。哺乳類は、ニホンジカ、イノシシが大部分で、ウマ、ウシの出土は見られない。魚類は、サメ類のように表層を泳ぐもの、コショウダイ、マダイ、クロダイなど岩礁性の外湾部を好むもの、コチのように砂泥性を好むもの。コイ、ウグイ、ナマズなど淡水域に棲むものに分類でき、人々が神戸水海、砂丘の外の外海、島根半島の磯、沖合いに漁労域を持っていったことを示す。土壤水洗の過程で炭化米、ムギ、マメ類も採集しており、種子の同定を継続している。古代・中世の貝塚の調査は珍しく、非農耕漁労民の生活の実相の一端に迫ることができた（出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996）。

君津市郡遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、特に古墳時代の須恵国造に関連すると考えられる豪族居館跡と、その後身の官衙的建築群、河川跡が発掘されている。動物遺存体の大部分は5世紀後葉から8世紀後葉と8世紀前葉から9世紀前半にかけての河川跡から出土した。出土した動物遺存体は、ウマ、ウシ、イヌ、ニホンジカとネズミザメ科の椎骨の垂飾品、大型のフグ類の歯板などであった（君津郡市文化財センター『郡遺跡群発掘調査報告書II』1996）。5世紀末から7世紀前半の河川（SD469）から出土した2点のト骨のうち、1点は、ウシの肋骨の幅広い部分を表裏に半截し、内側の海綿状組織に10×5mmの方形の彫り込み、鑽を連続して穿ち、そこに火箸を押しつけて生じる穴やひび割れの形状により占うものである。

ト骨は、中国においては元来、ウミガメの甲を用いるが、弥生時代になって日本に伝わって以来、素材の入手の困難性によるものか、イノシシ、ニホンジカの肩甲骨が多く、5世紀以降は、ウシまたはウマの肋骨を利用するとも行われた。

弥生時代のト骨が直接、火箸を当てるのに対して、古墳時代のト骨は、鑽を穿つ方法にかわる。ウシとウマの肋骨は断定では同定が困難であるが、幅広いウシのほうがト骨には向いていることから、他の例もウシの肋骨を素材に可能性が高い。

藤原調査部で行った7世紀中頃の山田寺造営時の整地土からも同様のト骨が出土しており、海綿質の特徴からこれもウシの肋骨を用いた可能性が高い。このようなト骨は、時代は降るが伊場遺跡では奈良時代前期、多賀城の第61次調査では9世紀後半の溝から出土しており、古代律令祭祀の中にも引き続き採用されたことがわかる。

(松井 章)

- 1
1・2 郡遺跡出土のト骨
(2は同一個体)
3 山田寺下層出土のト骨